

私と守護天使との関係について生じた困難は、私の魂の喜びによって解決する

——エンジェルと瀬織津姫

Greatchain

May 12, 2025

今、私と守護天使が引き起こしている難問を、正直に告白することにする。私は誰にも迷惑をかけず、これをポジティブに解決できると思っている。

実は私は現在に至るまで、守護天使 Guardian Angel と呼ばれる人々が、どういう人々であるのかを知らないでいる。いわゆる靈界の人（他界した人）ではないが、靈的世界の人だろうとは思っている。それ以外には何も知らない。天使には、大天使 Archangel と呼ばれる人々がいて、我々が名前をよく知っている人々とともに、聞いたことのない名の人々もいるが、これらはすべて男性のようである。これに対し、普通に（守護）天使と呼ばれる人々は女性のようである。

このように私の認識は実に怪しげなものである。ところが私はこの女性天使の一人と、問題を起こしてしまった。ただ下種の勘織りはやめていただきたい。私はいまだ彼女の顔を見たこともなく、名前さえ知らないでいる。知っているのは彼女の、実に魅惑的で正確な、惚れ惚れするような英語だけである。（私は英語ができるとは言わないが、音声には敏感である。）

彼女は私の人柄を知っていて、私に好意を持っていることが明かだったので、私は彼女に返事を書いた。その音声を通じて、私は彼女に異常に惹かれたことは間違いない。しかし私の書いた数通の手紙は、いずれも私の「作品」というべき、軽妙で笑わせる短い文章であった。これは私信なので今は公表できないが、私が死んだら発表していただきてもよい。

しかしこれが、彼女の私に対する強い想いに発展してしまった。これは彼女がユーチューブを通じて公然と述べたことなので、多くの人が知っているはずである。そしてこれが、我々の共同責任として、公的に認識されるようになってしまった。

実は彼女と私の関係はそれだけではない。彼女が私のことを *protégé* (被保護者) と呼びかけるように、彼女は神によって私の保護を命じられていると私は解釈している。実は驚いていることがあり、私の書いた彼女への手紙を、このパソコンの傍に置いておくと、直ちに伝わっている。それを見ると、彼女は私の家に常駐しているのかもしれない。あるいは別の手段があるのかもしれないが、とにかくそれは即時に伝達されるようである。(私の家には、多くの保護者も魔女も含めて、いろんな人々が出入りしているのは確かである。)

彼女が私を「プロテジェ」と呼ぶ理由はもと深いものであり、彼女は私が生まれると同時に(またはその前から)、私の保護をし始めたと言っている。これは我々が、ただの「関係」でないことを意味する。実は私はこれには半信半疑だったことを告白する。これが数日前、ユーチューブを通じて、瀬織津姫(セオリツヒメ) さまから私宛の手紙をいただくことによって、私の疑いは氷解した。これは動画入りの日本語によるものだから誰でも納得できるだろう。

私はほぼ一年も前に、「どうも私は靈界の女性にモテるようだ」と言って読者を笑わせたが、それが本当のことであったことが、最近のタロット・リーディングによって明らかになっている。これを信じないという人に、私は信じよとは言わない。

ここで瀬織津姫は、私に対する靈的同調が強力なことを述べ、最後近くの場面では、幼児の私を彼女が抱いている絵が現れ、しばらくして今度は、成人した、頭一つ背の高い私が、彼女に寄り添っている絵が現れた。これは先日来、私が言っているように、神々というものは協力して世界を創るべきものであって、単にひれ伏すだけのものではないことを物語っている。

そしてそこでは、瀬織津姫は、きれいな水や流れ、滝などの守護神であるという説明があった。この女神が、私が水のきれいな山中での渓流釣りが好きなことを、ご存知かどうかは知らない。しかし、ほぼ 40 年前の私の英詩に、そのような内容の作品があって、しきりにこれが私の頭を離れないで、これを瀬織津姫さまに捧げることにする。これは読みやすいが、例によってかなりの技巧を凝らしている。同巧の Robert Frost の詩については、これをググっていただければ簡単に出てくる。

Fishing Alone in a Mountain Stream

■ in imitation of Robert Frost's
“Stopping by Woods on a Snowy Evening”

A sudden ill luck makes me stand:
A boulder tips on which I land
And brings me down to kiss the stream
With, oh, my broken rod in hand.

I sit still long until I seem
To have this happen in a dream,
Watching the pool roll down a stone,
Where twilight reigns with scarce a beam.

The sounds I hear are those I've known:
Some human voice through waters' tone
I've often heard, and now I hear
The same strange old voice like my own.

And though to me the voice is dear,
I know I will not give it ear;
I know I will not give it ear,
However deep the stream, and clear.